

第5章

3つのリスク

麦倉 哲（岩手大学）

1 暮らし向き

（1）被災前の暮らし向き

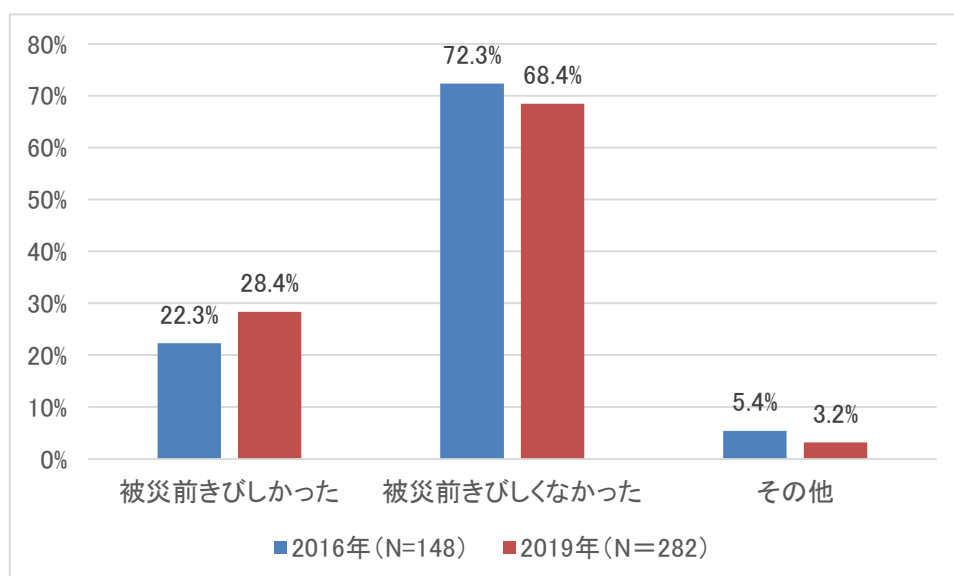
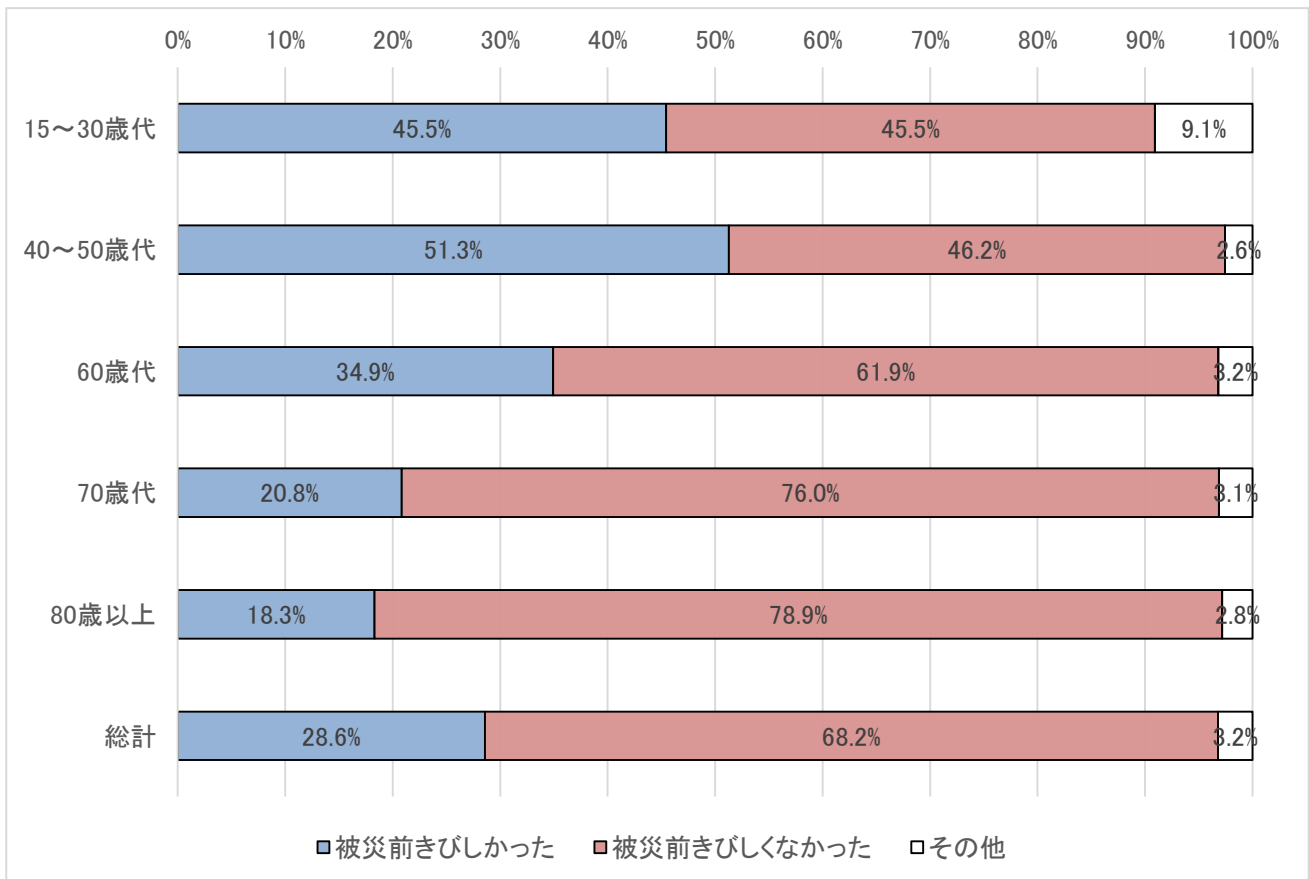


図5-1 被災前の暮らし向き —2016年調査・2019年調査

被災前の暮らし向きについて「きびしかった」か、「きびしくなかった」かうかがったところ、「被災前きびしくなかった」との回答が7割ほどであった。2016年調査と比べて、2019年調査ではこの比率はいくぶん少ない結果となった（2016年は72.3%、2019年は68.4%）。多数の人はきびしくはなかった。しかしながらその一方で、2割から3割の人は「被災前きびしかった」と回答した。この比率は、2019年の回答者で高く、28.4%であった。

被災地には、被災前からの暮らし向きの困難さがみられたのである。そうした状況の中で、大震災はさらに甚大な影響を与えたのである。



(注) 「15～30歳代」 N=11、「40～50歳代」 N=39、「60歳代」 N=63、
「70歳代」 N=96、「80歳以上」 N=71

図5-2 被災前の暮らし向き 一年齢階層別

年齢階層別に分析すると、震災前のきびしさは年齢階層によって大きな違いがあることがわかった。調査時（2019年8～9月）に15歳～50歳代までの階層では、被災前にきびしかったと回答する割合が高く、その一方で、70歳代以上の方は、被災前のきびしさの割合は、比較的低かったのである。

(2) 被災後の暮らし向き

被災後のきびしさについてうかがったところ、2019年調査では、56.8%の方は、「被災後きびしい」と回答した。「被災後きびしくない」は34.9%で、「その他」は8.3%であった。これらの数値を、2016年調査と比較すると、ほぼ同様の結果であった。

2016年までに公営住宅に入居している方と、2019年までの入居者では、同じ対象の集団ではないが、結果はほぼ等しいという結果となった。これは対象層として同じ傾向の集団であるということを再確認できたという解釈できるし、また2016年から3年が経過した2019年においても、以前と同様の、暮らし向きの面で、容易でない状況にあることが再確認できたということであろう。以下のようなケースがみられる。

「震災がなければあと5年くらいは仕事が出来たと思う。収入面で老後が心配」(70歳代女性)

「仕事をしようと思っても、ヘルニアで動くことができない。」(70歳代女性)

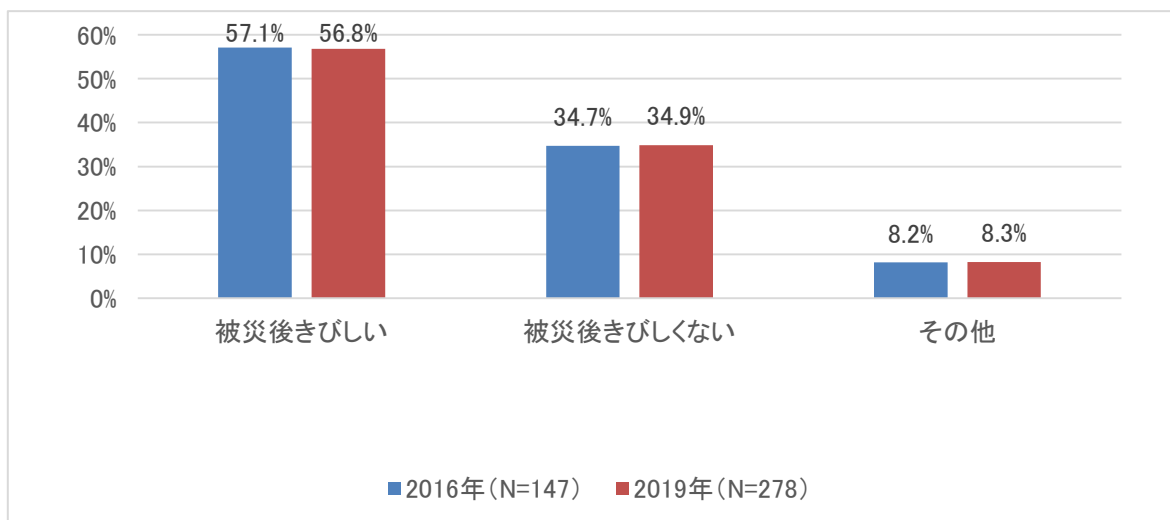
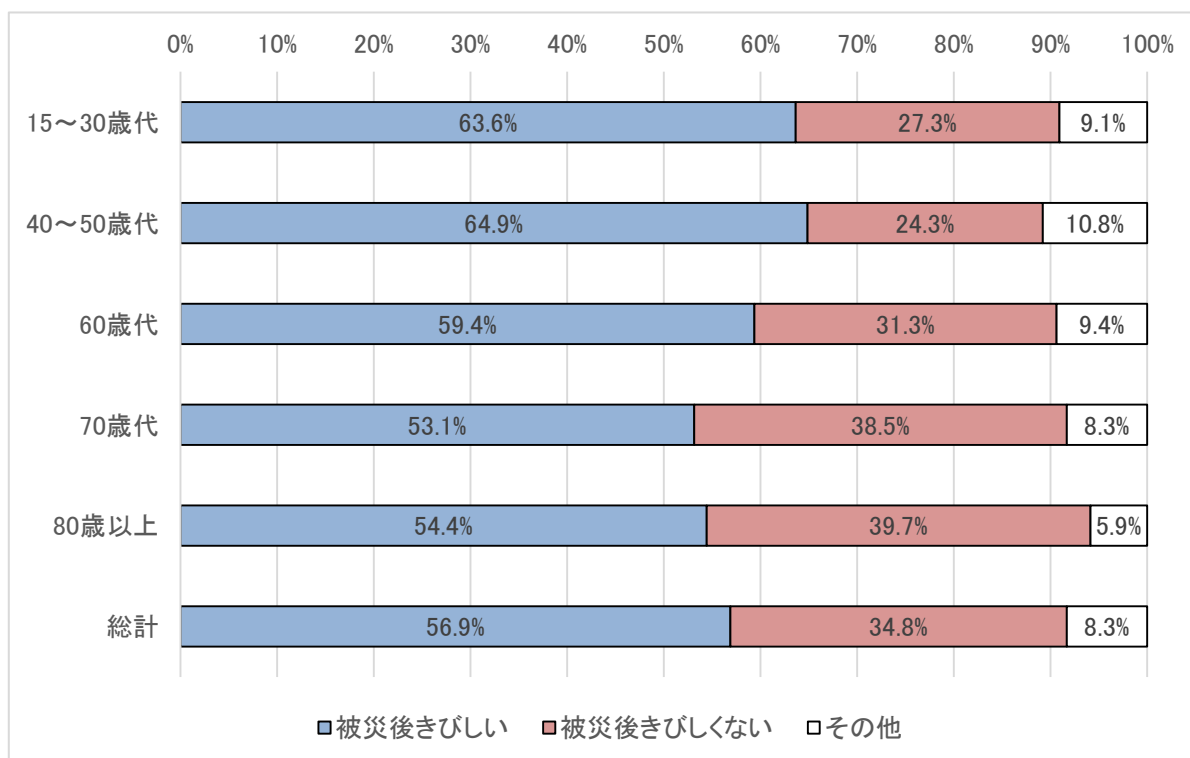


図5-3 被災後の暮らし向き —2016年調査・2019年調査



(注)「15～30歳代」N=11、「40～50歳代」N=37、「60歳代」N=64、
「70歳代」N=96、「80歳以上」N=68

図5-4 被災前の暮らし向き —年齢階層別

(3) 被災前のきびしさと被災後のきびしさの組み合わせ

①年階層別考察

被災後の暮らし向きを、年齢階層別にみていくと、すべての年齢階層において、被災前よりもさらに暮らし向きが厳しくなったという結果がうかがえる。15歳から50歳代までの比較的若年の階層では、被災後のきびしさの比率が60%台に上がっている。また70歳代以上の階層では、きびしいとの回答の比率が、50%台と高い値に転じている。

これについては、震災前からの暮らし向きの困難な状況に加えて、被災による大打撃の影響があるとみられる。その影響は年代層に及ぶ。そして、70歳代以上の高齢階層においては、きびしさにおける増加傾向がはなはだしいともいえる結果であることから、被災による経験が現在の高齢者階層においてきびしいものとなっているとみられるのである。

過去10年間の暮らし向きの推移が、大震災を経験して、劇的にきびしくなっている年齢階層が高齢層であるということがいえるのである。

表5-1 被災前のきびしさと被災後のきびしさの差異

年齢階層5区分	被災前きびしかった	被災後きびしい	前と後の差	上昇順位
30(15~30歳代)	45.5%	63.6%	18.1ポイント 上昇	4位
40(40~50歳代)	51.3%	64.9%	14.6ポイント 上昇	5位
60(60歳代)	34.9%	59.4%	24.5ポイント 上昇	3位
70(70歳代)	20.8%	53.1%	32.3ポイント 上昇	2位
80(80歳以上)	18.3%	54.4%	36.1ポイント 上昇	1位
全体	28.6%	56.9%	28.3ポイント 上昇	平均

②被災前と被災後の組み合わせの類型

暮らし向きがきびしい(●)か、きびしくない(○)かについて、被災前のことについて聞いた質問と、被災後のことについて聞いた質問を組み合わせると、4通

りの組み合わせができる。その他を含む回答が約1割で、それを除く約9割について、4通りに分類してみた。すると、いちばん比率が高いのが、「被災後きびしくなった」(37.4%)であり(Bタイプ)、次いで「前も後もきびしくない」(26.6%)であり(Cタイプ)、さらに「前も後もきびしい」(18.7%)が3番目であった(Aタイプ)。

被災後きびしいグループ(「前も後もきびしい」●●+「被災後きびしくなった」○●)は合計で56.1%、被災後きびしくないグループ(「前も後もきびしくない」○○+「被災後きびしくない」○●)は合計で、34.2%であった。

表5-2 被災前後のきびしさの種類

被災前と後のきびしさ			被災後のきびしさ	
A: ●→●	前も後もきびしい	18.7%	56.1%	今きびしい
B: ○→●	被災後きびしくなった	37.4%		
C: ○→○	前も後もきびしくない	26.6%	34.2%	今きびしくない
D: ●→○	被災後きびしくない	7.6%		
E	その他	9.7%	9.7%	その他

Aタイプ●→● 前も後もきびしい

このタイプは、被災前も被災後も「きびしい」という方である。自由記述回答からは、次のような方がみられた。

イさん 70歳代女性「(家賃が)今のところ8000円。これ以上あがったらこまる。」

ロさん 80歳代女性「生活保護は嫌だ。できるだけ自分の力で生活したい。」

Bタイプ○→● 被災後きびしくなった

このタイプは、被災前は「きびしくなかった」が、被災後は「きびしい」と回答した方である。

ハさん 80歳代女性「(被災前は)夫がいたから。」

ニさん 80歳代女性「一人になったからきびしい。」

ホさん 70歳代女性「家賃が発生した。」

へさん 70歳代女性「(被災前は)働けたから。」「(被災後は)働けないから。」

Cタイプ○→○ 前も後もきびしくない

このタイプは被災前も「きびしくない」、そして被災後も「きびしくない」という方である。

トさん 80歳代女性「年金で暮らしているから、生活保護は受けたくないと考えている。」

Dタイプ●→○ 被災後きびしくない

このタイプは、被災前は「きびしかった」が、被災後は「きびしくない」と回答している方である。

チさん 70歳代女性：被災前は「景気が悪くて」たいへんで、被災後は「年金とパートで」暮らしている。

Eタイプ その他 その他と回答した方

このタイプが「その他」と回答したパターンを含む。多様であるが、困難な面が多々うかがえるのである。

リさん 70歳代男性：被災前は「きびしい」、被災後は「その他」で「家族3人の年金と地震保険がある」と回答した。

震災前はきびしかったと答えたが、震災後は「その他」であった。加齢により、年金受給者の家族の数が増えたことと、住宅については、地震保険に加入していたことで、金銭的なダメージは軽減された。このようなことで「その他」との回答になったものである。

災害への備えとしての保険が有効であった。ただし、年金受給者の数が、さらなる加齢により減少することで、変動も予想される。

ヌさん 60歳代女性：被災後は「大工の仕事が増えたから」ということで「その他」と回答した。復興関連の仕事が増えたことと関係している。ただし、こうした仕事もまた流動的である。

ヲさん 70歳代女性：被災前「その他」被災後も「その他」と回答した。「無職で（収入は）年金（のみ）で、金銭的に厳しい。」ということである。

その他のタイプには、ポジティブな例もみられるが、どちらかというときびしい例も少なくない。

ワさん 90歳代女性：被災前「その他」被災後も「その他」と回答した。被災前は「まあまあ厳しかった。子育ての手伝いがあったため。」と自由回答で記述し、被災後は「まあまあ厳しかった。全てのことをやるのがつらい。」と回答した。

カさん 70歳代女性：被災前は「その他」、被災後は「きびしくない」と回答した。被災前は「姑がきびしかった」そうである。

ここで紹介した事例が、ほぼみな女性となったのは、理由について自由に述べたり自由記述欄に記載したりする傾向が、女性のほうがかなり多いことの反映である。

表 5 - 3 被災後のきびしさと世帯の種類

	被災後きびしい	被災後きびしくない	その他	全体
高齢世帯	96 (53.6%)	71 (39.7%)	12 (6.7%)	179 (100.0%)
子ども世帯	4 (80.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	5 (100.0%)
その他の世帯	53 (61.6%)	24 (27.9%)	9 (10.5%)	86 (100.0%)

被災後の暮らし向きのきびしさについて、世帯の3類型でみていくと、子ども世帯の5世帯のうち4世帯が「被災後きびしい」と回答し、残る1世帯は「その他」と回答している。災害公営住宅の特徴として、子育て世帯が少ない傾向が顕著であるため、比率で論じるのは難しい面があるものの、5人の回答からは、子育て世帯の暮らし向きのきびしさは明らかといえる。

2 生計

(1) ひと月の収入

ひと月の世帯の収入について、5万円きざみでうかがった。いちばん多いのは「10～15万円未満」、2番目が「5～10万円未満」である。この2つで半数以上となる。要するに、5万円から15万円のあいだで、生計が維持できるような対策が求められる。住宅費として支出できる金額は限られるので、家賃負担の軽減化が求められる。

他方で、20万円を超える世帯は、「20～25万円未満」(9.7%)、「25～30万円」(2.9%)、「30万円以上」(5.9%)の合計で2割弱みられる。この層には妥当な高すぎない家賃が求められる。育児や教育、介護に負担があり、また自宅再建のための貯蓄を計画している世帯の事情も考慮して、高すぎない家賃政策が求められる。また、収入が「ない」世帯(2.1%)、「5万円未満」の世帯には、生活費の扶助が求められる。

2016年調査と比較すると、収入状況が改善している傾向がうかがえる。これはその後に入居した人の趨勢か、それとも復興への時間の経過による改善か、あるいは両者の併合した傾向かである。収入なしは5.2%から2.1%へと減少し、2016年には第一位であった「5～10円未満」に代わって、「10～15万円未満」が第一位となっている。さらに、20万円以上の層も総じて増加している。

今後は、25万円以上や30万円以上の層の人が家賃の減額措置がなくなり、それ相応

の家賃を納めなければならなくなった時に、公営住宅に居住継続できるかなどの課題も浮かび上がってくると思われる。

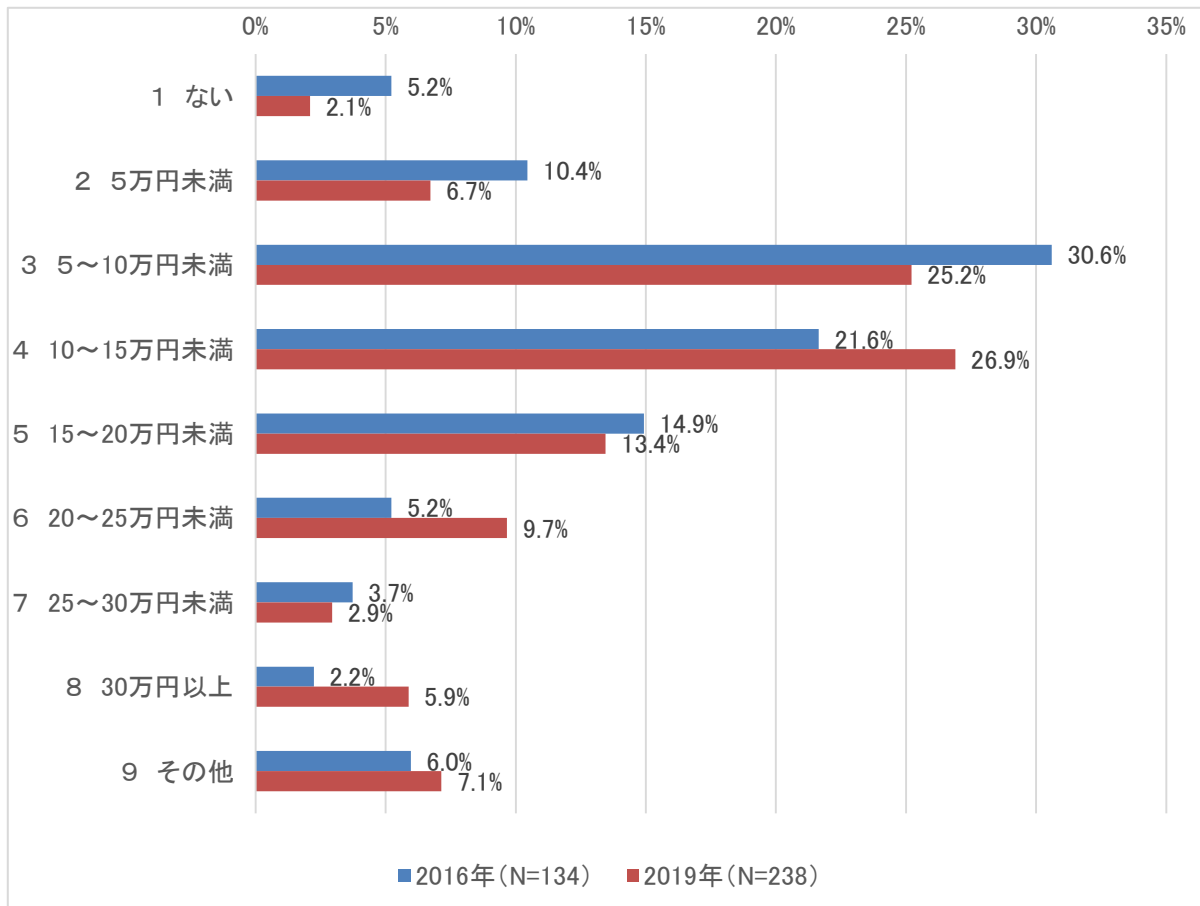


図 5 - 5 ひとつきの世帯収入 —2016 年調査・2019 年調査

(2) 収入の種類

回答者の収入の種類についてうかがった。収入元が複数ある場合は、いちばん多い収入の元をうかがった。それによると、第一は「年金」で約7割(69.2%)を占める。次に、「給与による収入」が17.0%であり、この2つが大半を占める。これ以外では、「家族による世話・扶養」が2.5%、「貯金の切り崩し」と「生活保護費」がそれぞれ2.2%である。

2016年調査と比較すると、「給与により収入」が増えているものの、その一方で「自営業による収入」が減っている。これは、自営業の継続が困難であるという面と、公営住宅入居者の中では、自営業者が非常に少ないという現状を物語っているものと思われる。また、「生活保護」が幾分増え、他方で「預金の切り崩し」が減少していることがうかがえる。「家族による世話・扶養」の人や、預金が乏しくなっていると思われる人のことを考えると、収入がないか、少ない層において、公営住宅入居者では、生活保護の受給を必要とする層が現状からみてももっと多いというようにうかがえる。

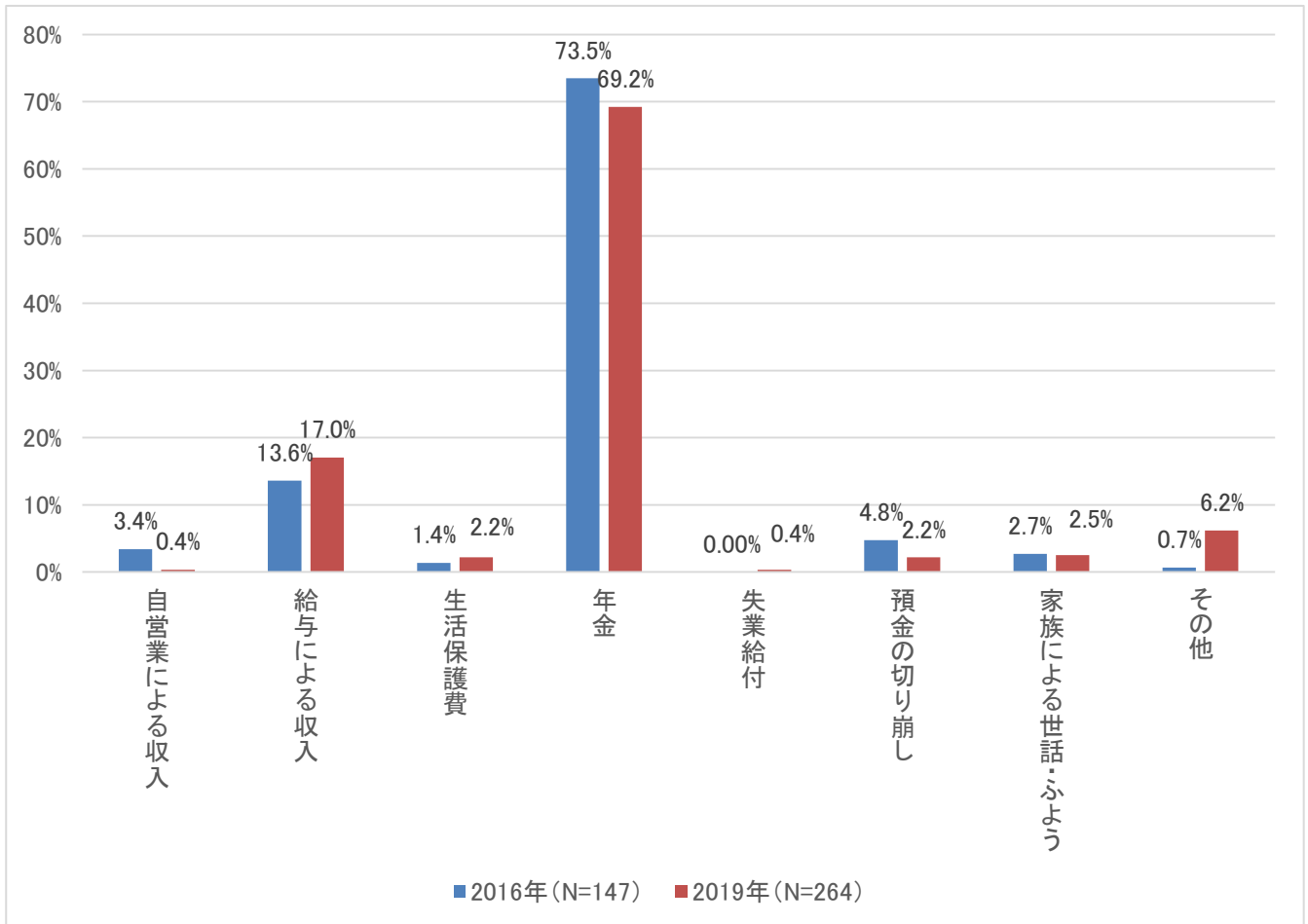


図 5 - 6 収入の種類 —2016 年調査・2019 年調査

(3) 収入の種類／年金

年金にも種類があり、国民年金、厚生年金、共済年金、農業者年金、遺族年金、障害者年金などである。年金の中でいちばん多いのは、「国民年金」である。次いで「厚生年金」である。これら 2 種で多数を占める。それらに次いで、「遺族年金」「障害者年金」がみられる。

2016 年調査と 2019 年調査とを比べると、「国民年金」は差がないものの、厚生年金は大幅に上昇している。雇用が拡大したか、あるいはこの 3 年間に新しく入居した世帯の影響と思われる。また、「障害者年金」と「遺族年金」の比率は減少している。

一般に、厚生年金と比べて、国民年金は支給額が少ない。入居者の生活の安定性を考慮すると、国民年金の支給額の最低限を引き上げる等の一般施策としての社会保障の充実が望まれる。最低年金やベーシックインカムを導入こそが最も有効な被災者支援策の 1 つであると筆者は考える。

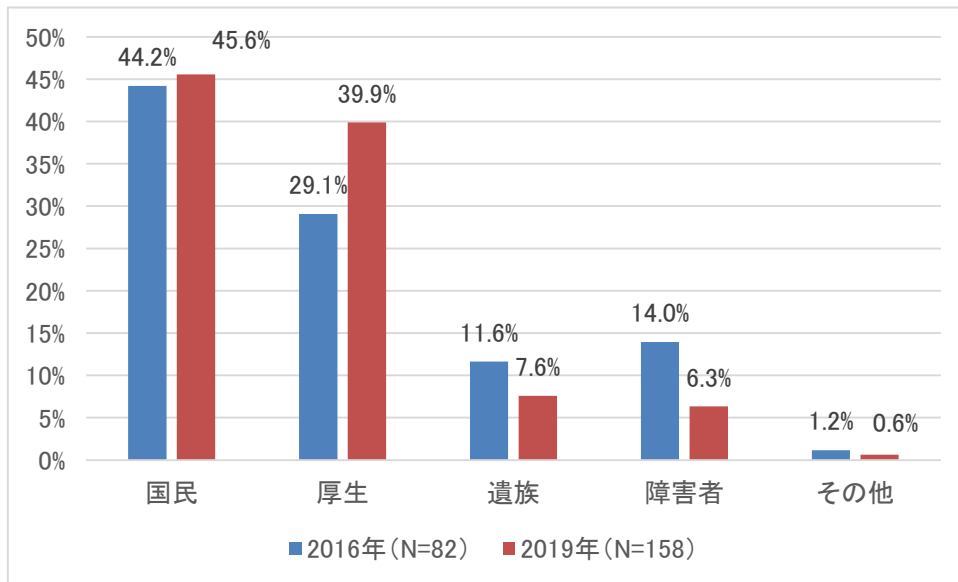


図 5 - 7 年金の種類 —2016 年調査・2019 年調査

(4) 借金・ローン

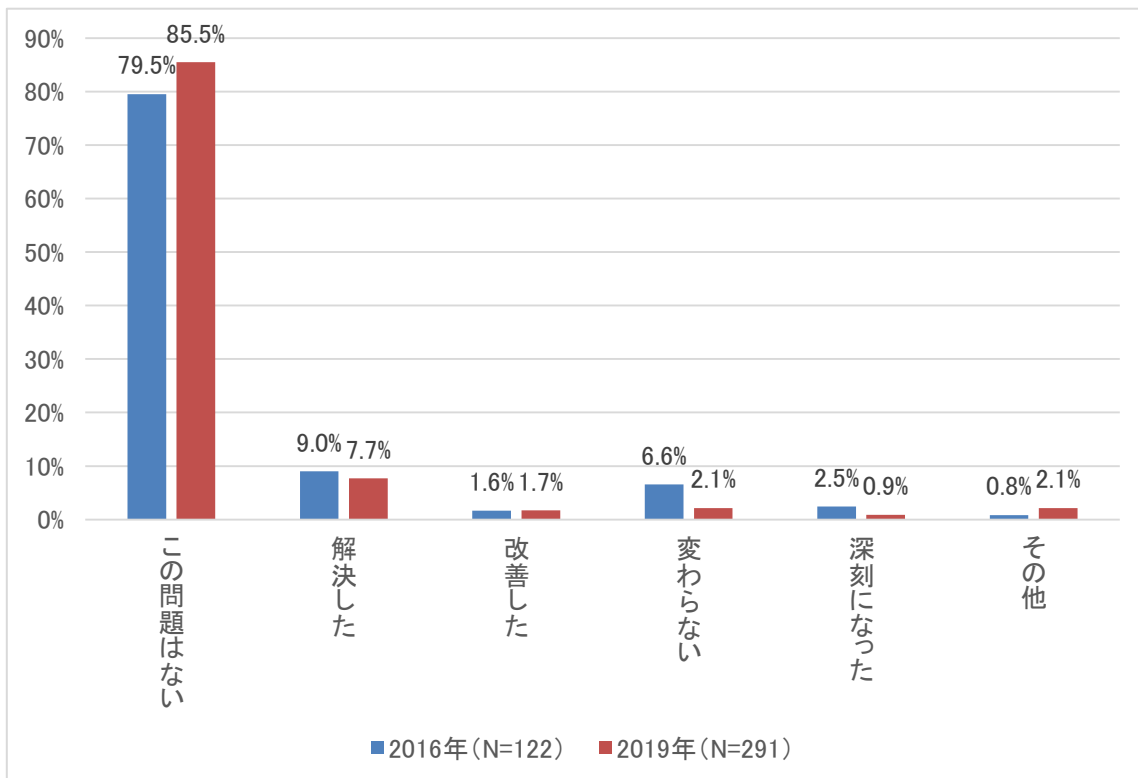


図 5 - 8 借金・ローンの有無 —2016 年調査・2019 年調査

ある程度の収入が確保できたとしても、家賃が上昇したり、また借金・ローンの返済があったりすれば、生活は安定しない。借金・ローンに関する質問では、8割5分（85.5%）が「この問題はない」と回答した。「解決した」も1割弱（2016年9.0%、2019年7.7%）みられた。

2019年調査で、借金・ローン問題が残っているのは、「改善した」(1.7%)、「変わらない」(2.1%)、「深刻になった」(0.9%)と、「その他」(2.1%)を合計した比率、6～7%である。2016年が、これらの合計が1割以上みられたことと比べて、改善したとみられる。しかしながら、比率は減ったものの、この問題の当事者にとっては、生活の不安要素であり、限られた人々への相談支援なども重要な課題である。

3 精神の面について

(1) 心の平穩

被災後の心の平穩の状態について、「被災から時が経過し、気持ちの面では、平穩になりつつある」「被災から時が経過し、気持ちの面では、ほとんど変わりが無い」「被災から時が経過し、気持ちの面では、かえってきびしくなっている」「その他」の選択肢でうかがった。

その結果、2019年調査では、「平穩になりつつある」は3割に至らず(27.0%)、「かえってきびしくなっている」が依然として23.8%みられた。回答でいちばん多かったのは、「ほとんど変わりが無い」の45.4%であった。2019年の回答は、2016年と大きく異なっている。「平穩になりつつある」が減少し、「かえってきびしくなっている」が上昇しているのである。こうしたことから、被災者の心の復興は、時間の経過とともに改善されていくほどに単純ではなく、多様な展開をみせ、かえってきびしくなる面があるということである。

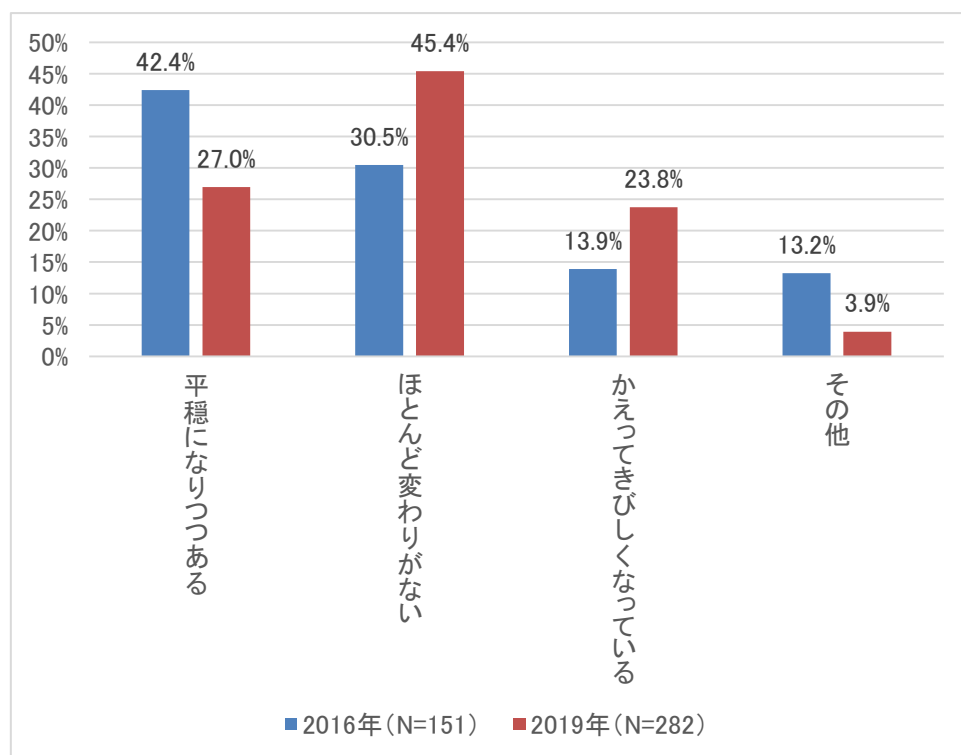


図5-9 心の復興 - 2016年と2019年調査

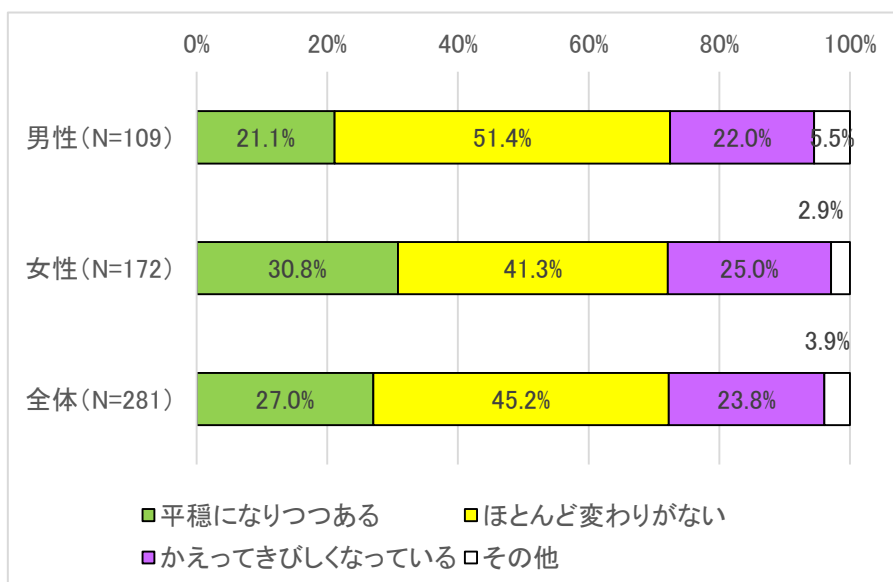


図 5 - 10 心の復興 - 男女別

心の復興状況を男女別でみていくと、「平穩になりつつある」の比率は、女性のほうが高く、また「かえってきびしい」の比率も、女性のほうが若干高い。女性は、男性に比べて心の復興が進んでいる傾向がみられる。

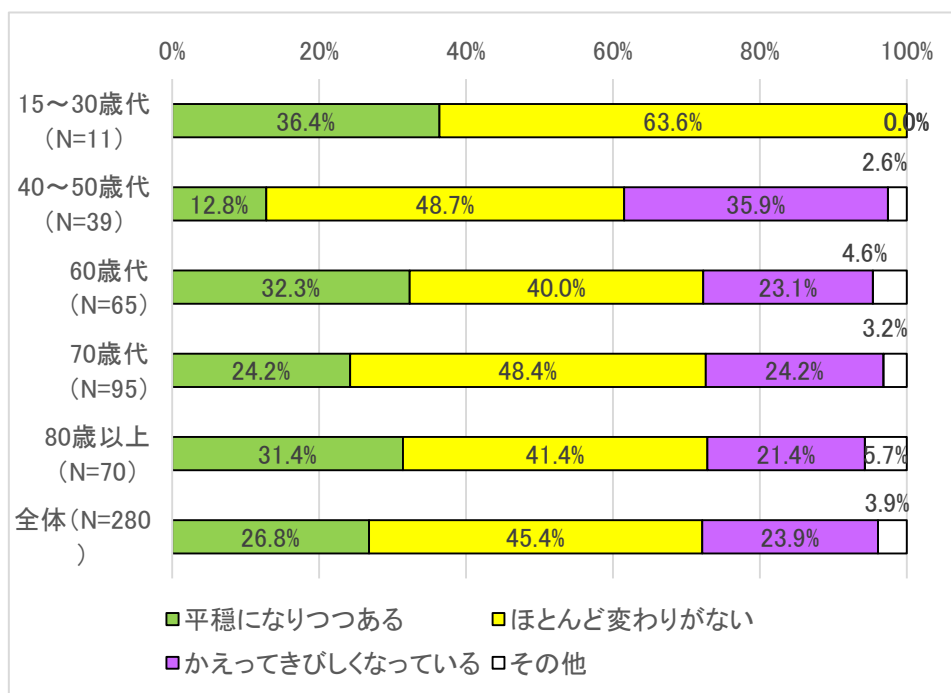


図 5 - 11 心の復興 - 年齢階層別

年齢階層別にみていくと、「40～50 歳代」の層で、「平穩になりつつある」が特に低く、また「かえってきびしい」の比率が特に高い。こうした年齢層にしわ寄せのいく復興状況の困難さがうかがえるのである。

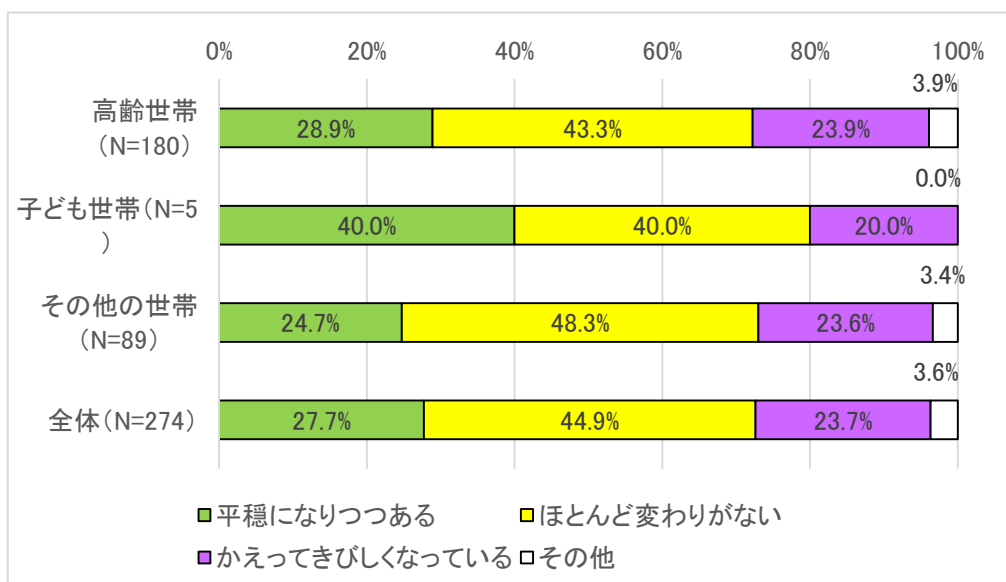


図 5 - 12 心の復興 - 世帯の 3 類型別

世帯の 3 類型を比較すると、「子ども世帯」の場合は、他と比べてよい傾向がうかがえる。災害公営住宅の特徴として、子育て世帯が少ない傾向が顕著であるため、比率で論じるのは難しい面があるものの、子どもがいることが、心の復興や希望につながるとすれば望ましいことである。しかしながら、子ども世帯の一部では困難な様子もうかがわれ、必要な支援が望まれる。

(2) WHO-5

WHO-5とは、精神の健康について、表 5-4 に示した A から E までの 5 つの事項について、最近 2 週間の状態を回答する質問への回答結果を分析する方法である。「A 明るく、楽しい気分で過ごした」か、「B 落ち着いた、リラックスした気分で過ごした」か、「C 意欲的で、活動的に過ごした」か、「D ぐっすりと休め、気持ちよくめざめた」か、「E 日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった」かについて、5 点から 0 点で自己評価するものである。

表 5 - 4 WHO-5 の評価表

5つの項目	いつも	ほとんどいつも	半分以上の期間を	半分以下の期間を	ほんのたまに	まったくない
A 明るく、楽しい気分で過ごした。	5	4	3	2	1	0
B 落ち着いた、リラックスした気分で過ごした。	5	4	3	2	1	0
C 意欲的で、活動的に過ごした。	5	4	3	2	1	0
D ぐっすりと休め、気持ちよくめざめた。	5	4	3	2	1	0
E 日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった。	5	4	3	2	1	0

5項目の評価を合計して12点以下の場合は、精神の健康状態において困難があることを示している。2019年調査では、12点以下の低スコアの人の比率は4割弱(38.2%)であった。この数値は、2016年調査の42.6%を下回るもので、WHO-5のスコアからみた精神の状態はいくぶん改善がみられることを示している。

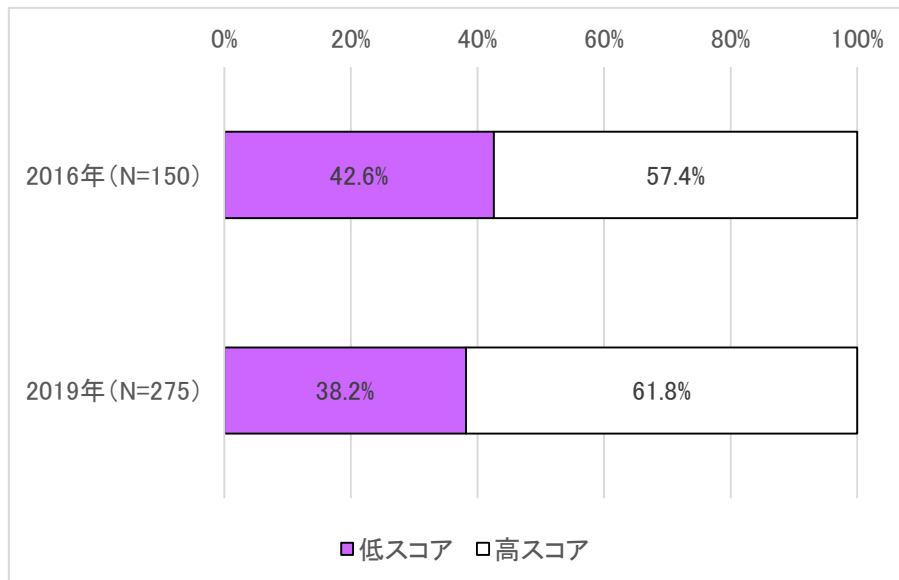


図5-13 WHO-5 -2016年調査・2019年調査

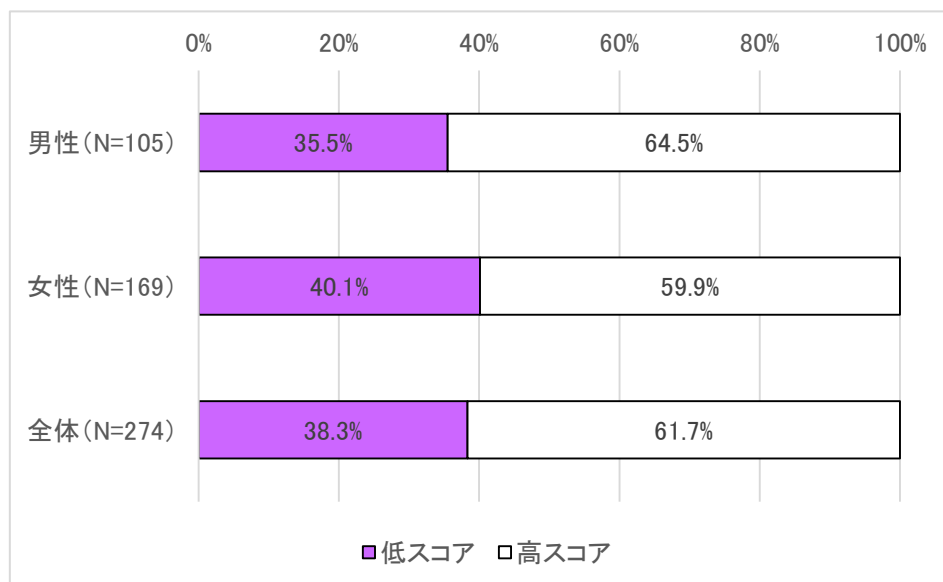


図5-14 WHO-5 -男女別

WHO-5のスコアを男女別で見ると、女性のほうが困難の比率がいくぶん高いという結果となった。これについては、可能性として、精神の健康面で支障のある男性の回答率が低いという事情があるとも思われ、単純には判断できない。男性の回収率

が低いという本調査の結果が、影響をしている可能性もある。

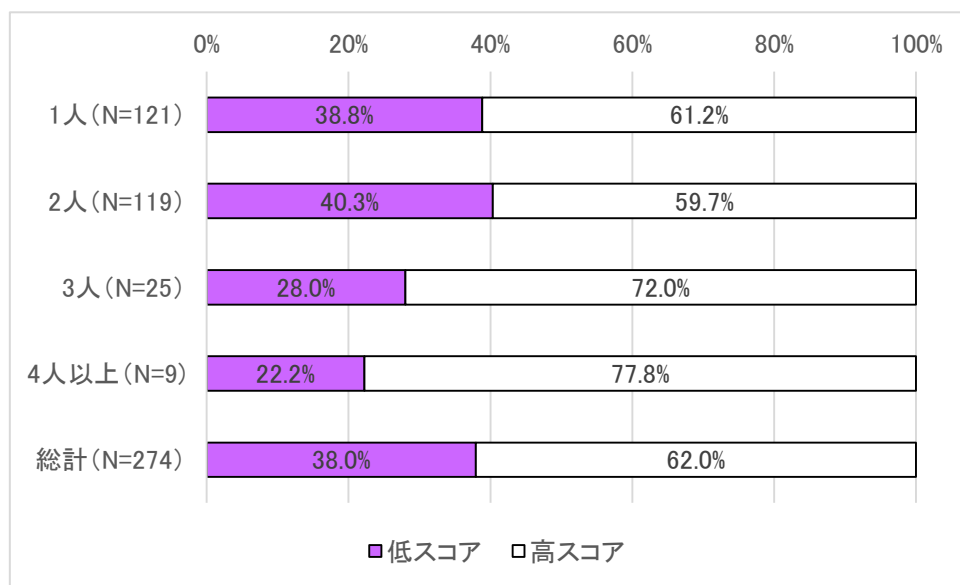


図 5 - 15 WHO - 5 - 世帯人数別

次に、世帯人数別にみると、世帯人数の多い世帯では、低スコアの比率が低く、相対的に見て、精神的に健康な状態にある人が多いという結果がみられた。

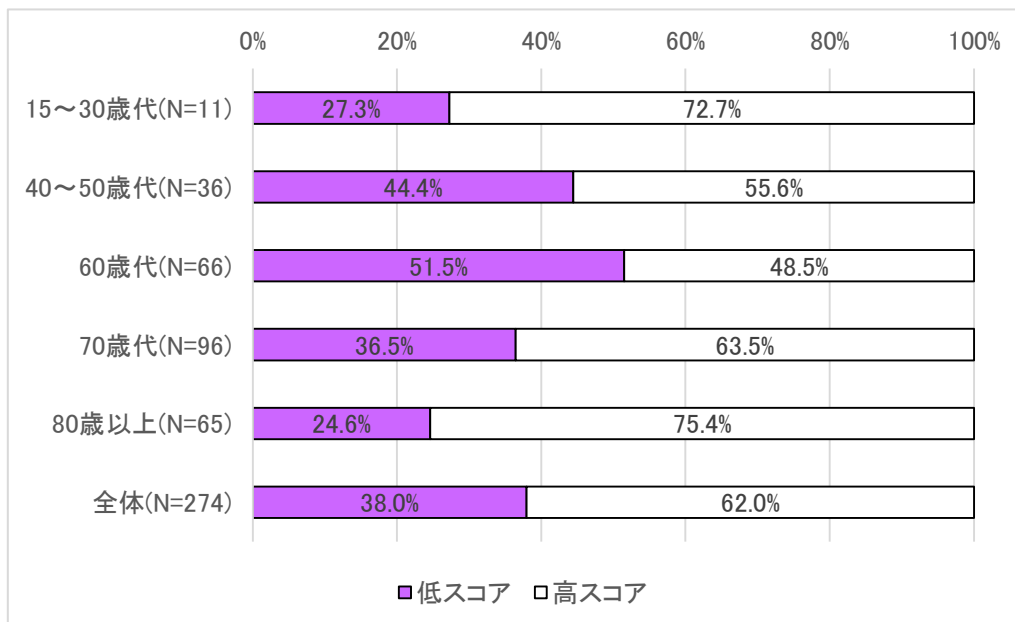


図 5 - 16 WHO - 5 - 年齢階層別

次に、年齢階層別にみると、比較的若い人と、80歳上の高齢者で、低スコアの比率が低い、つまり精神的な健康の状態である人の比率が高いという結果がみられた。精神的に健康で元気な高齢者が回答するという傾向が出ていたともとれるが、こうした

高齢者の精神的な健康を維持ならびに、低下を食い止める対応が求められるといえる。

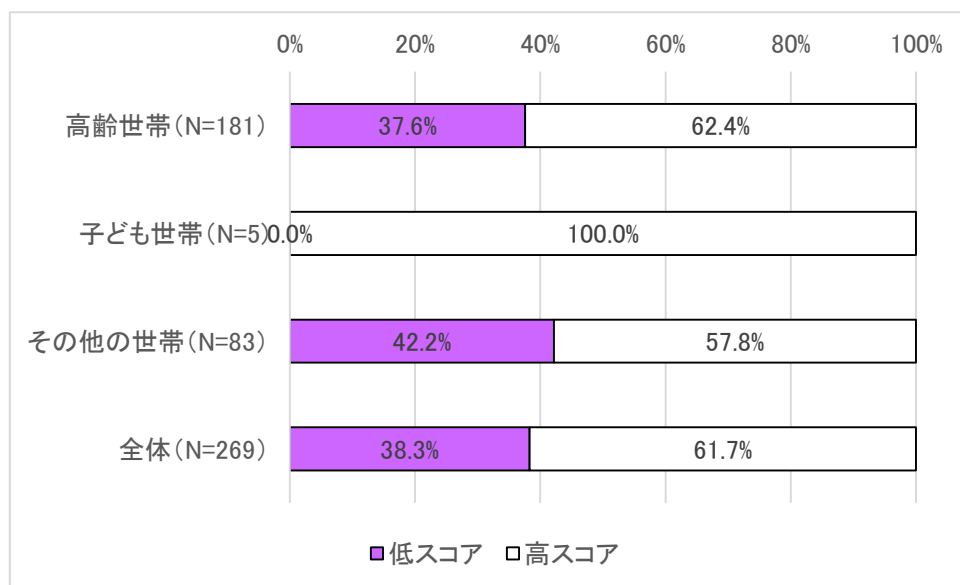


図 5 - 17 WHO - 5 - 世帯 3 類型別

次に、世帯 3 類型別にみていくと、「子ども世帯」で、サンプルが少ないながら、低スコアがゼロであることが示され精神的な健康状態がうかがえることがわかった。

WHO - 5 スコアを団地別にみていくと、団地により差異が大きいことがわかった。サンプル数が少ない団地の場合は、単純に解してはならないが、サンプル数が少ない団地の中では、「上町」「大町」「浪板」「吉里吉里第 2」「吉里吉里」「三枚堂第一」などで比較的健康的な結果がみられた。

この調査は、調査時点から過去 2 週間の状態を調べたものであり、その後の多様な要因の連関で、数値が変わっていく可能性があり、行政や支援者や地域社会の取り組みとしては、改善の方策の工夫が求められていると思われる。

表5-4 WHO-5スコア 一団地別

公営住宅の地区	低い	高い	低い	高い	総計
1=吉里吉里	26.3%	73.7%	5	14	19
2=柁内	40.0%	60.0%	2	3	5
3=屋敷前アパート	31.0%	69.0%	13	29	42
4=大ヶ口 1 丁目	47.8%	52.2%	11	12	23
5=源水	33.3%	66.7%	2	4	6
6=大ヶ口 2 丁目	30.0%	70.0%	3	7	10
7=柁内第 2	40.0%	60.0%	2	3	5
8=末広町アパート	42.1%	57.9%	8	11	19
9=浪板	25.0%	75.0%	3	9	12
10=寺野・臼澤第 1	57.1%	42.9%	4	3	7
12=本町	50.0%	50.0%	4	4	8
13=御社地アパート	75.0%	25.0%	6	2	8
14=上町	20.0%	80.0%	3	12	15
15=上町第 2	42.9%	57.1%	6	8	14
16=大町	25.0%	75.0%	4	12	16
17=大町第 2	33.3%	66.7%	1	2	3
18=吉里吉里第 2	25.0%	75.0%	1	3	4
19=赤浜三日月	100.0%	0.0%	2		2
20=赤浜海洋研裏	44.4%	55.6%	4	5	9
21=安渡第 2	33.3%	66.7%	2	4	6
22=安渡 C 県営アパート	50.0%	50.0%	2	2	4
23=三枚堂第 1	28.6%	71.4%	2	5	7
24=三枚堂第 2	80.0%	20.0%	4	1	5
25=三枚堂第 3	36.4%	63.6%	4	7	11
26=三枚堂第 4	33.3%	66.7%	3	6	9
27=寺野・臼澤第 3	50.0%	50.0%	2	2	4
28=町方 1 県営大町アパート	100.0%	0.0%	2		2
全体	38.2%	61.8%	105	170	275

4 関係の面について

(1) 過去1か月の訪問者

1か月の訪問者に関する質問で、「a：訪ねてきた人はいない」は約1割で、2016年と2019年調査における差異はほぼない。「家族・親族」の訪問では2019年が高く（2019年62.7%、2016年55.9%）、「知人・友人」では2019年が低い（2016年52.6%、2019年43.6%）。行政の訪問（「役所の事務的な訪問」「心身面の相談員」「生活面の相談員」）、「ボランティアの人」では2016年が高く2019年が低くなっている。「仮設住宅で親しくしていた人」では2016年が高く、「今の地域で親しい人」では2019年が高い。訪問の多くの項目では訪問率の減少が目立つものの、「今の地域で親しい人」（2016年17.8%、2019年19.9%）では数値が上がっていることから、行政が重点をおいているコミュニティの活性化は一定の効果をあげているともみえるものの、課題はまだ山積のようにはうかがえる。

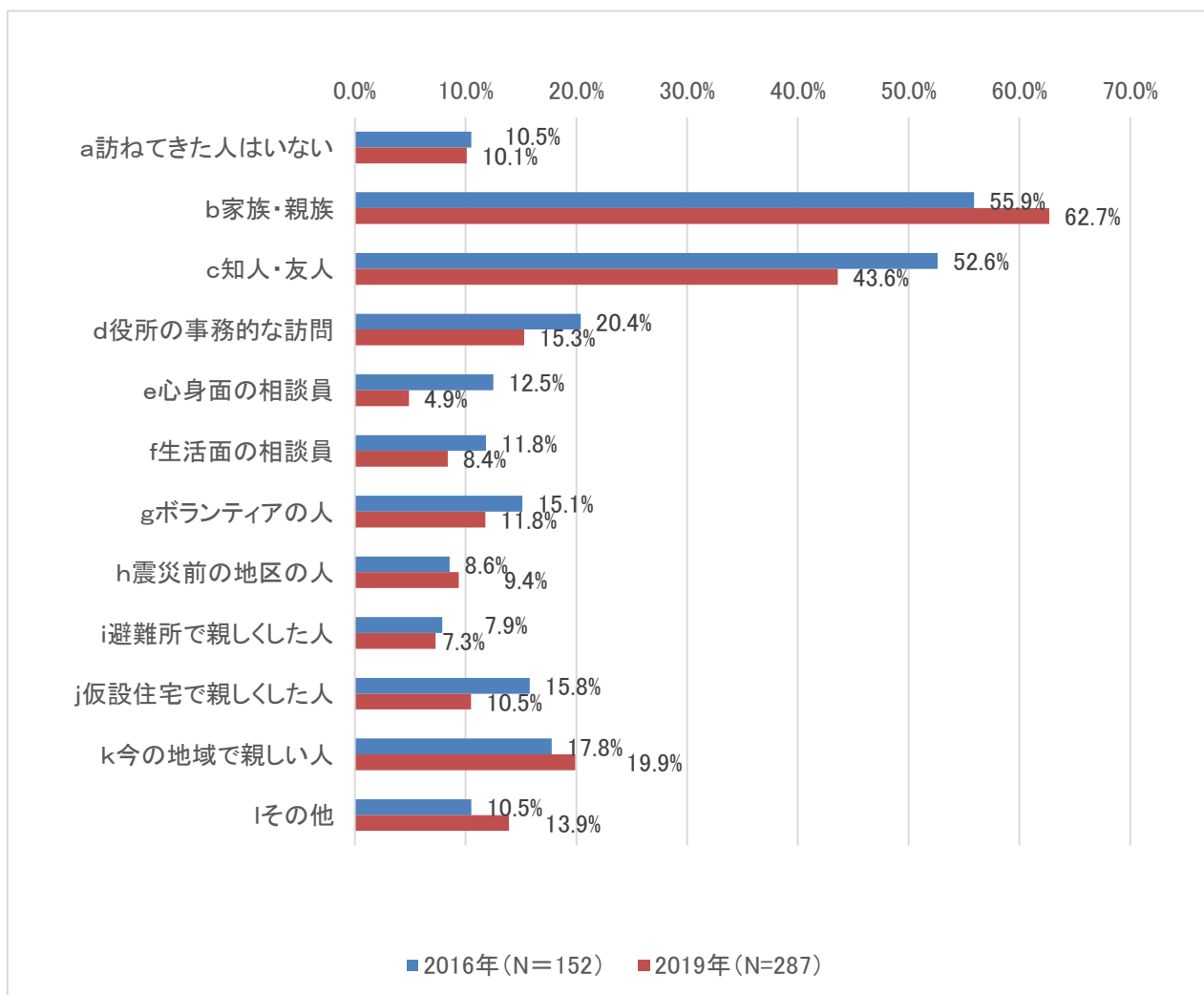


図5-18 1か月の訪問者 - 2016年調査・2019年調査

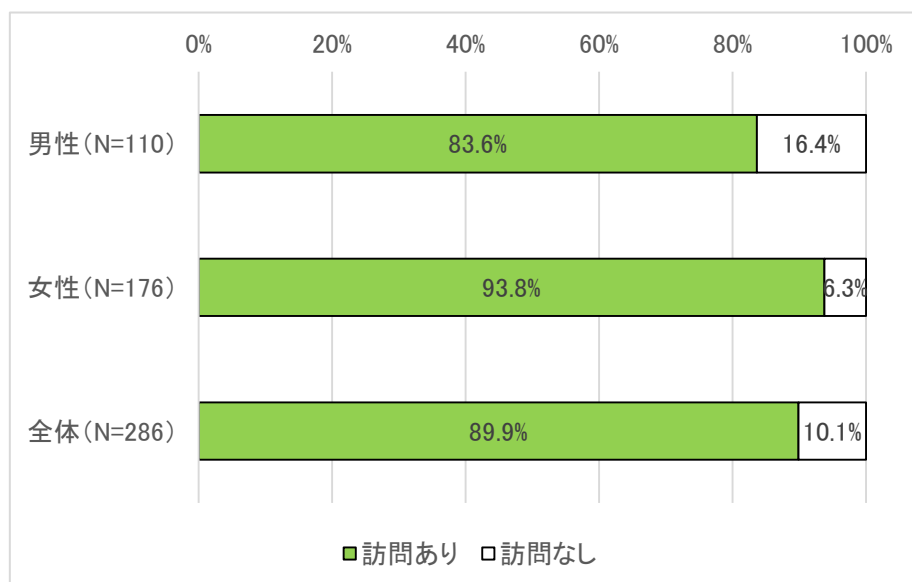


図 5 - 19 1 か月の訪問者 - 男女別

過去 1 か月の訪問者の有無について「訪問なし」の比率を性別で見ると、男性で 16.4%、女性で 6.3%と、性差が著しい。このことから、男性が孤立しやすい傾向が高いといえる。

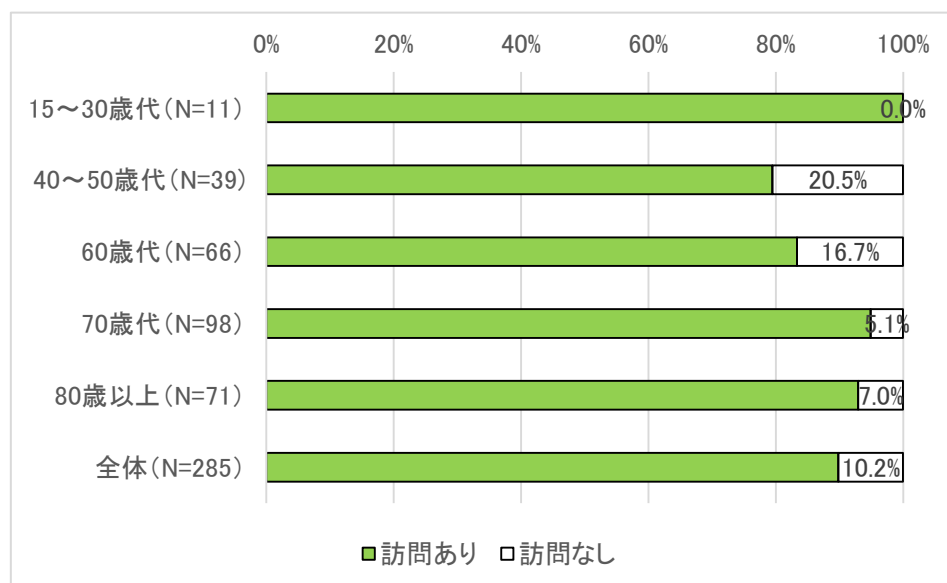


図 5 - 20 1 か月の訪問者 - 年齢階層別

年齢階層別に「訪問なし」比率をみると、「40~50歳代」で 20.5%、「60歳代」で 16.7%と低く、社会的活動力が高いと思われる年代で、自宅訪問者の比率が低いことがわかった。

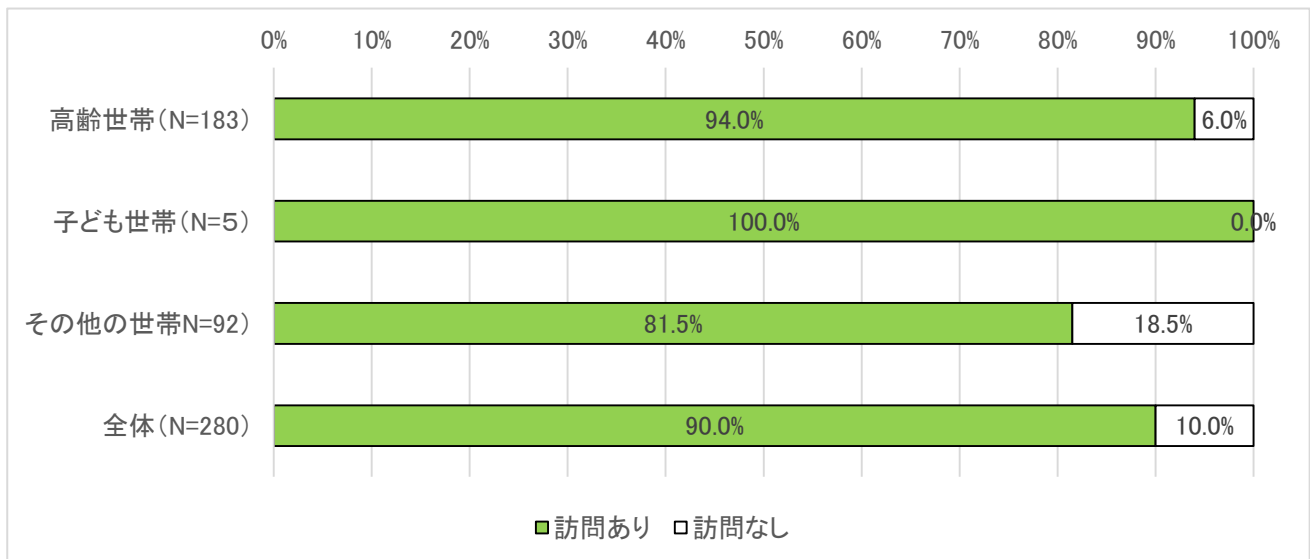


図 5 - 21 1 か月の訪問者 - 世帯の 3 類型別

3 世帯の類型別で見ると、「その他の世帯」で 18.5%と訪問なしの比率が高いことがわかった。

(2) 交友活動・地域活動について

友人との交友活動や地域活動の有無や活動内容についてうかがう質問では、「友達と会う、連絡をとる」がいちばん多かった。しかし次いで多いのが、「とくにない」であった。3 番目は「団地や周辺町内会のイベントなどに参加」であった。

2016 年調査と比べて、「とくにない」の比率は減り、交友や団地内等での活動などが増え、地域コミュニティの活性化の努力が図られている影響がうかがえる。しかしながら、約 4 割の人が「とくにない」と答えていることは見逃せない。

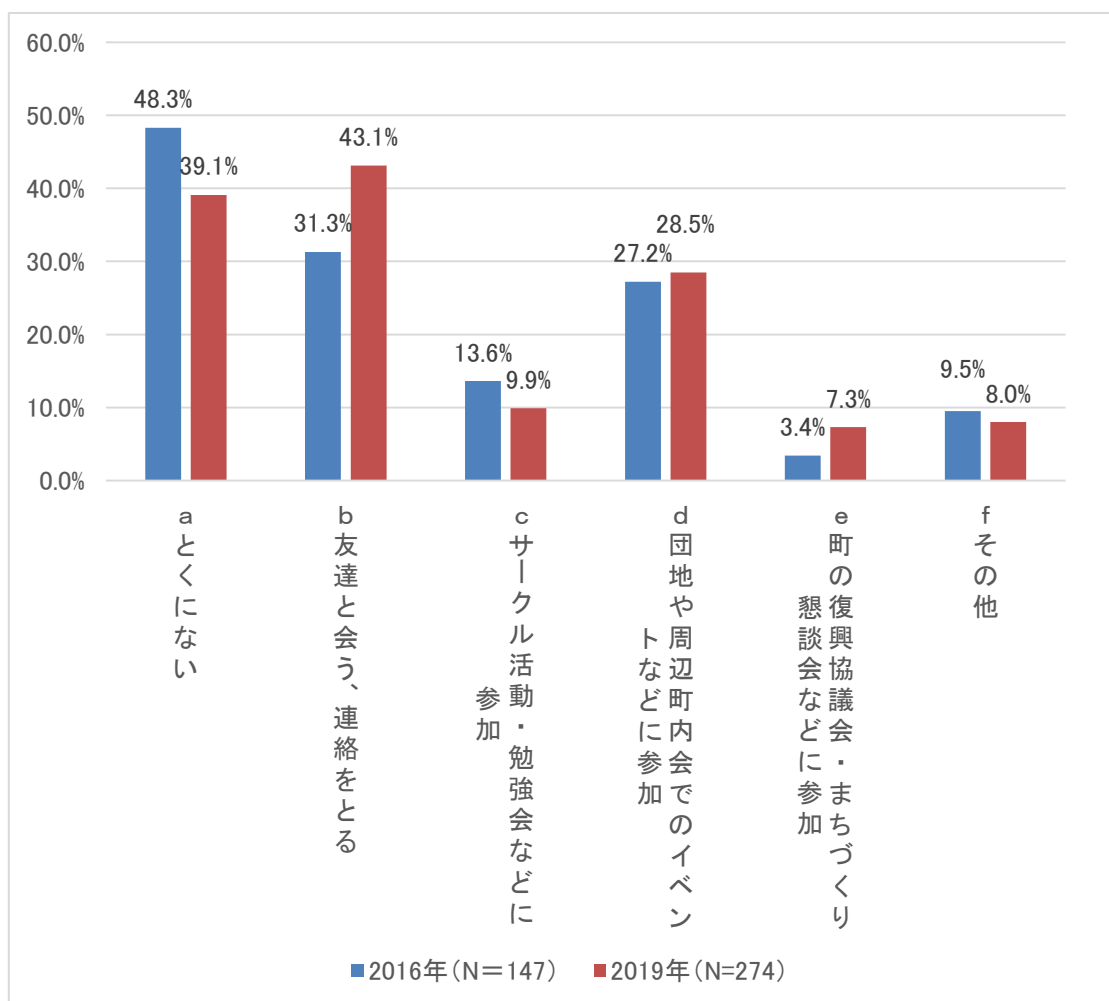


図5-22 交友活動・地域活動 — 2016年調査・2019年調査

交友活動や地域活動が「とくにない」の比率について、男女別でみると、男性のほうが活動なしの比率が高いことがわかる。

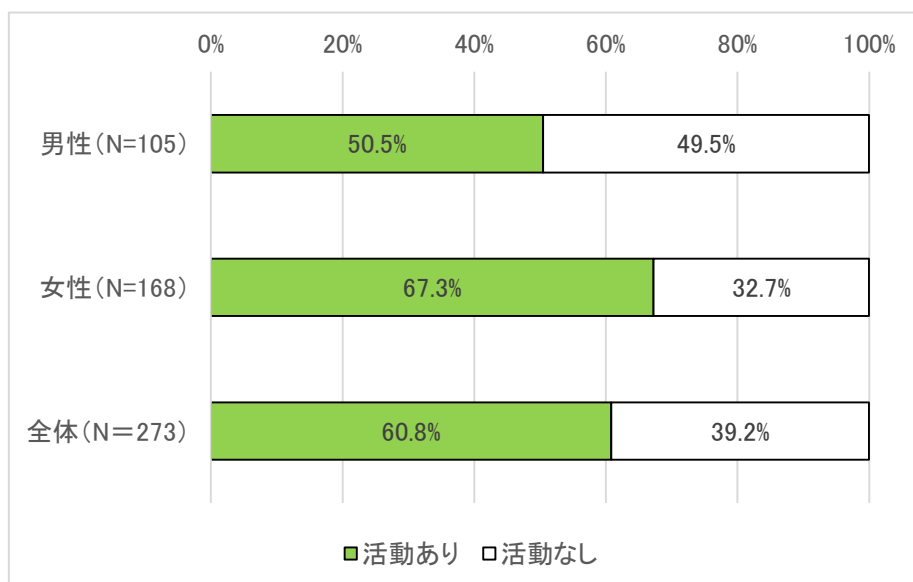


図 5 - 23 交友活動・地域活動 - 男女別

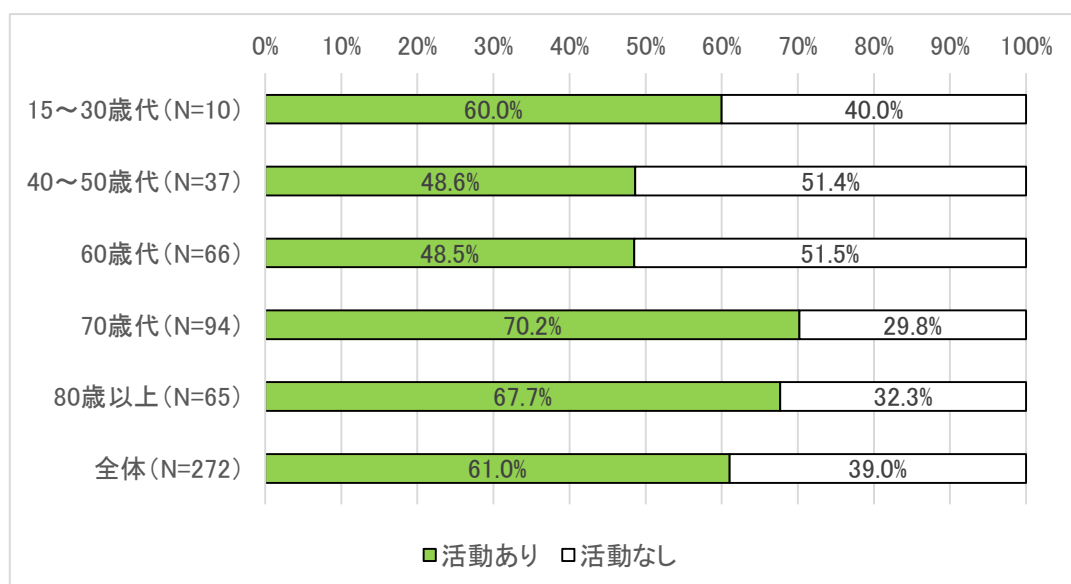


図 5 - 24 交友活動・地域活動 - 年齢階層別

年齢階層別でみると、40歳代から60歳代の実年世代で、「とくにない」の比率が高く、活動がない様子がうかがえる。この年齢層に、余暇を活用するなどの余裕がない傾向があるとも考えられる。

(3) 家庭のだんらん、移動手段などについて

交友関係の充実には家庭でのだんらんの様子や、交通移動手段の諸条件などの影響も考えられる。そこで、この2点の推移について考えたい。

①家族のだんらんや楽しい時

楽しいと感じる時について質問した。その中で、いちばん多く選ばれたのは「テレビを観たり、ラジオを聞いている時」、第2位が「知人・友人と会っている時」であった。そして「家族のだんらん」が3位であった。この3つはそれぞれポイント(%)で2016年の調査結果を上回っており、これらの点での楽しみの度合いが増したのではないか。しかしながら、テレビ・ラジオが最上位であることは、他者との交流の面で充実していないということの裏返しともみられる。なにがなんでも交流すべしとの前提は妥当ではないものの、交流の希望があっても実現できていない層への働きかけや、機会の創出など、工夫の余地があるかもしれない。

調査結果では、「趣味に取り組んでいる時」の比率が、2016年の調査と比べて減少している。居住者の希望に沿った活動の機会を創出することも求められているように思われる。

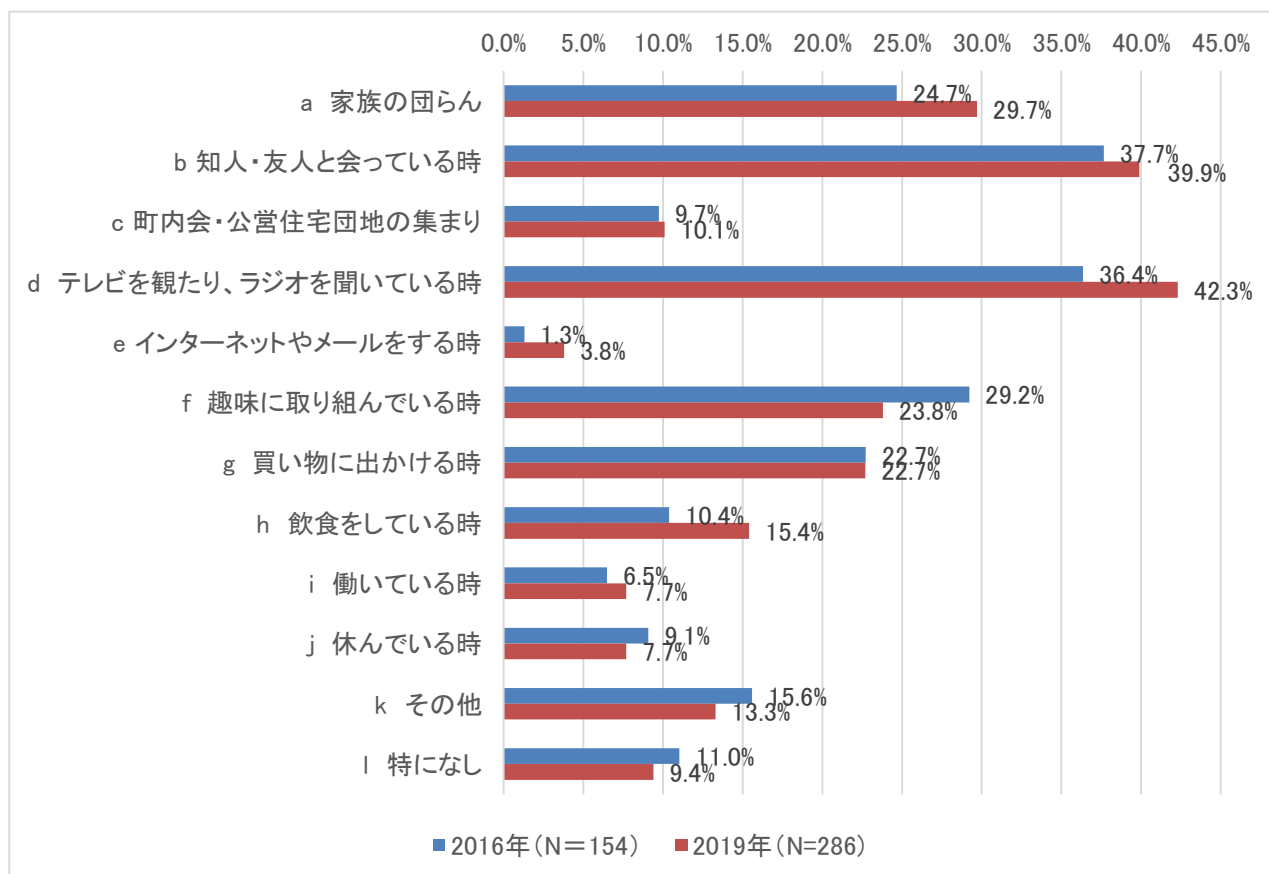


図5-25 いちばん楽しいと感じるとき - 2016年調査・2019年調査

②交通手段について

買い物の時の交通手段についてうかがった質問によると、「自分が運転する車」が1位で、「バス」が2位、「家族が運転する車」が3位、以下「タクシー」「徒歩」と続く。

自家用車については、自分が運転する場合も、家族が運転する場合も、移動の手段として重要な位置を占めている。しかしながら、この移動手段は、自分自身や家族の高齢化・障害化等により、徐々に制約を受けるようになる移動手段である。特に、高齢者が多い被災地や公営住宅において重要な課題である。高齢ドライバーの事故の多発により、免許を返上したと回答する方は、本調査の結果から少なからずみられた。しかし、その場合は、公共交通の充実が図られ、有効に維持されなければならない。

復興事業として行われてきたバス路線への国の補助事業が2022年に終了する見通しのなかで、大槌町がどのように有効な路線を維持していくかは高齢者の社会参加を支えていく上で重要である。移動手段で急増したのが「タクシー」である。タクシーは便利であるものの、費用の負担が少なくなく、頻繁に使用できる交通手段とはなかなかいかない。タクシーを利用する費用負担等の支援や工夫がさらに図られる必要がある。

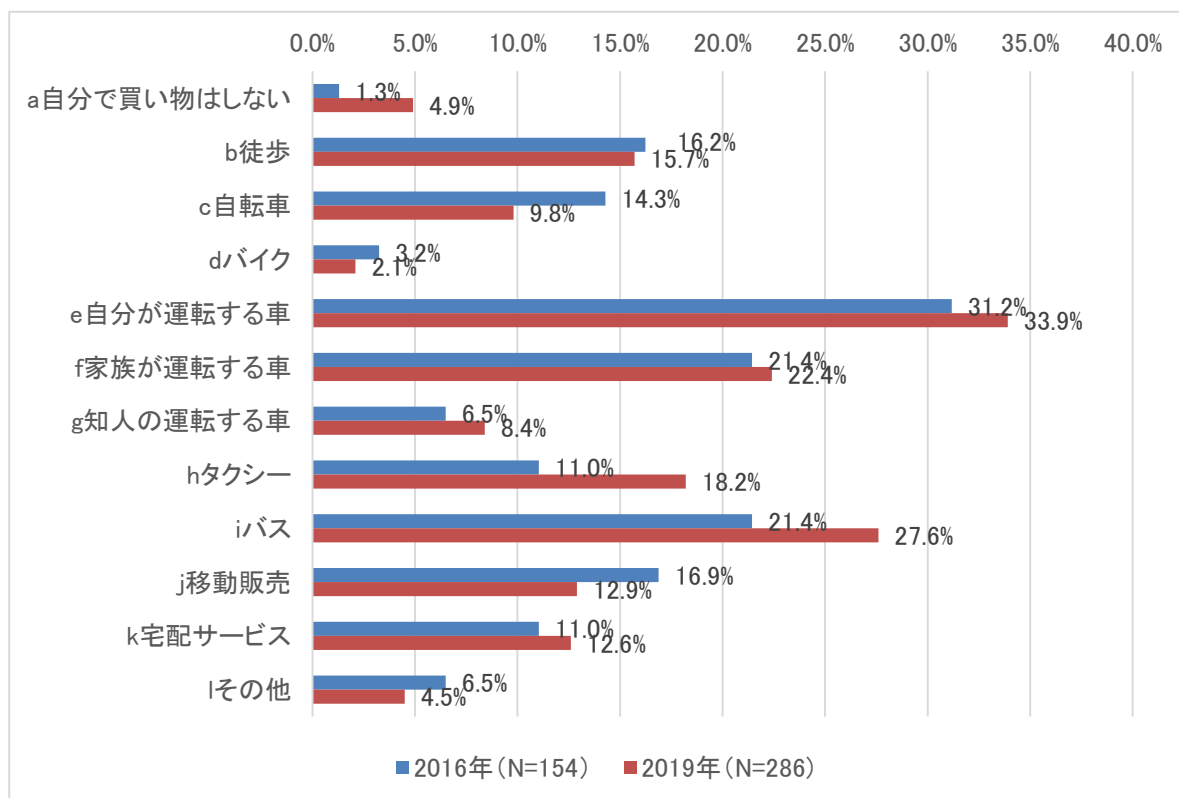


図5-26 買い物時の交通手段 - 2016年調査・2019年調査

5 3つのリスクの種類

被災者は、人によっては被災前からのきびしさをかかえているが、そのきびしさが被災後の現在はどうなっているか。複数の質問への回答結果から考えたい。

ここでは、生活に関する困難を生活上のリスクとし、生活する上でのリスクを、3つの側面から考えようとしている。リスクには3つがあり、その3つとは、A：生計面で

のリスク、B：精神面でのリスク、そしてC：関係面でのリスクである。

A：生計面では、被災後の（現在の）「暮らし向きがきびしい」と選択した人をリスクありとし、B：精神面では、被災後の気持ちが「気持ちの面がかえってきびしい」と回答した人、もしくは、WHO-5（精神的健康）への回答スコアが低い人（12点以下）をリスクありとし、C：関係面では、過去2週間に（公営住宅への）「訪問者がいない」と回答した場合、もしくは「交友や地域での活動が「とくにない」と回答した人をリスクありとした。

その結果、3つともリスクなしは、約2割（21.6%）であったが、なんらかのリスクありは、8割弱（78.4%）であった。その一方で、3つのリスクのいずれにも該当する3重リスクの人は、2割弱の17.2%であった。リスクが2つ以上重なる多重リスク（2重リスク＋3重リスク）の人は、4割を超え44.3%であった。この比率を2016年公営住宅調査と比較すると、ノーリスクにおいて等しい結果となっているものの、多重リスクでは、2016年が48.9%（2019年が44.3%）、3重リスクが20.9%（2019年が17.2%）であることから、いくぶん改善しているとも考えられる。

公営住宅入居者の生活のリスクは、やや改善傾向もみられるものの、依然として多くの方がなんらかのリスクを抱え、4割以上の方にとってはそれが多重化している。こうした現状は、行政や支援者や地域関係者による一定の方策や活動による成果を映し出すものともいえるし、他方で、行政、支援関係者、地域関係者による公助と共助によるリスク回避や支援継続の取り組みが引き続き重要であることを示唆しているといえよう。

表5-5 3つのリスクに関する質問とチェックポイント

3つの面	質問項目	チェックポイント
A 生計面のリスク	被災後の（現在の）暮らし向ききびしい	左に該当の場合＝「リスク」
B 精神面のリスク	気持ちの面がかえってきびしい	左のいずれかに該当の場合＝「リスク」
	WHO-5（精神の健康で低スコア＝12点以下）	
C 関係面のリスク	過去2週間訪問者がいない	左のいずれかに該当の場合＝「リスク」
	交友や地域での活動がない	

表5-6 3つのリスクの種類と比率

3つのリスクの種類	リスクの内容	比率	4分類	3分類	リスクあり/なし
ABC型:3重リスク	生計・精神・関係リスク	17.2%	17.2%	多重リスク 44.3%	あり = 78.4%
AB型:2重リスク	生計・精神リスク	12.7%	2重リスク		
AC型:2重リスク	生計・関係リスク	7.6%	27.1%		
BC型:2重リスク	精神・関係リスク	6.9%			
A型:シングルリスク	生計のみリスク	16.8%	シングルリスク 34.0%	34.0%	
B型:シングルリスク	精神のみリスク	8.2%			
C型:シングルリスク	関係のみリスク	8.9%			
X型:リスクなし	リスクなし	21.6%	21.6%	21.6%	21.6

(注)N=291

表5-7 3つのリスクの多重性 (2016 公営住宅調査)

リスク種類:比率		生計	精神	関係	小計
シングルリスク		15.1%	3.6%	10.8%	29.5%
多重リスク	2重リスク	28.1%			48.9%
	3重リスク	20.9%			
ノーリスク(リスクなし)		21.6%			21.6%